

北見工業大学広報誌 [オホーツクスカイ]

Okhotsk Skies

KITAMI INSTITUTE OF TECHNOLOGY



2008 Vol.8



平成20年4月から国立大学法人北見工業大学の第8代学長を務めております。

昭和35年に北見工業短期大学として産声をあげた本学は、平成22年には創立50周年の節目の年を迎えます。本学では創立記念行事を25年と40年のときに挙行しています。

創立40周年のときの記念祝賀会において、来賓のOBの方からいただいたお祝いのことばのなかに、次のような内容があったことを記憶しています。

「・・・この祝賀会に参加するにあたって、知人から40周年という中途半端な年数で記念行事を行うのは、50周年までもたないかもしれないからか、と冷やかされました・・・」。幸い本学は、その後も充実発展し、50周年を迎えようとしております。さりながら、わずか8年前の40周年のときに比べますと、国立大学を取り巻く環境は法人化に代表されますように激変しており、我が国最北に位置する工学系単科大学である本学もその大波を受けております。

そのようななかで本学は、地元の方々に中心に設立いただいた大学後援会「KITIげんき会」や1万人を超える規模になりました卒業生で構成される同窓会の皆様方の応援もあり、国立大学法人評価委員会による毎年度の業務評価で高い評価を受けてい

[巻頭寄稿]

北天に光を放つ北見工業大学

学長 鮎田 耕一

略 歴	
昭和44年 3月	北海道大学大学院工学研究科 土木工学専攻修士課程修了
昭和59年 3月	工学博士(北海道大学)
昭和44年 3月	北見工業大学工学部講師
昭和46年 4月	北見工業大学工学部助教授
平成元年 6月	北見工業大学工学部教授
平成6年 4月	北見工業大学地域共同研究センター長
平成8年 4月	北見工業大学附属図書館長
平成12年 4月	北見工業大学副学長
平成16年 4月	北見工業大学理事・副学長
平成18年 4月	北見工業大学学長補佐 工学部土木開発工学科長
平成20年 4月	北見工業大学学長

るほか、財務状況などに対する格付け機関からも20段階中、上から3番目の「AA」と評価されています。加えて「環境にやさしいテクノロジーの発展」を掲げている本学としては、欠かせない環境マネジメントシステムの国際規格であるISO14001の認証も取得するなど着々と実績をあげています。

これからも北見工業大学教職員全体の意欲と情熱と能力を充分に引き出すことで、教育の質を保証し社会に受け入れられる人材を育て、本学ならではの特色ある研究の一層の飛躍・展開を図り、社会に貢献する「北天に光を放つ北見工業大学」を目指して全力を尽くしてまいります。



- 3** 北天に光を放つ北見工業大学
学長 鮎田 耕一
- 4** 市民に開かれた知の拠点としての図書館をリニューアルオープン
図書館長 青木 清
- 6** 研究広報シリーズ〈2〉南極からみる地球
- 14** 誌上公開講座〈2〉ホモ・ルーデンス／アソビ人の楽しい知識
- 18** 国際交流
・韓国 慶尚大学交流研修を終えて
・台湾勤益科技大学との国際交流締結
- 22** 諸報

(表紙)

8月9日、「おもしろ科学実験」を開催しました。本事業は、子供たちの科学への興味・関心を喚起することを目的として平成12年度から毎年夏休みに開催しています。今年は協賛の北海道電力(株)北見支店の実験を含め19のテーマが用意され、約500人の小・中学生が参加しました。本学教員、学生の指導のもと、熱心に実験に取り組んでいました。



市民に開かれた 知の拠点としての図書館を リニューアルオープン

図書館長 青木 清

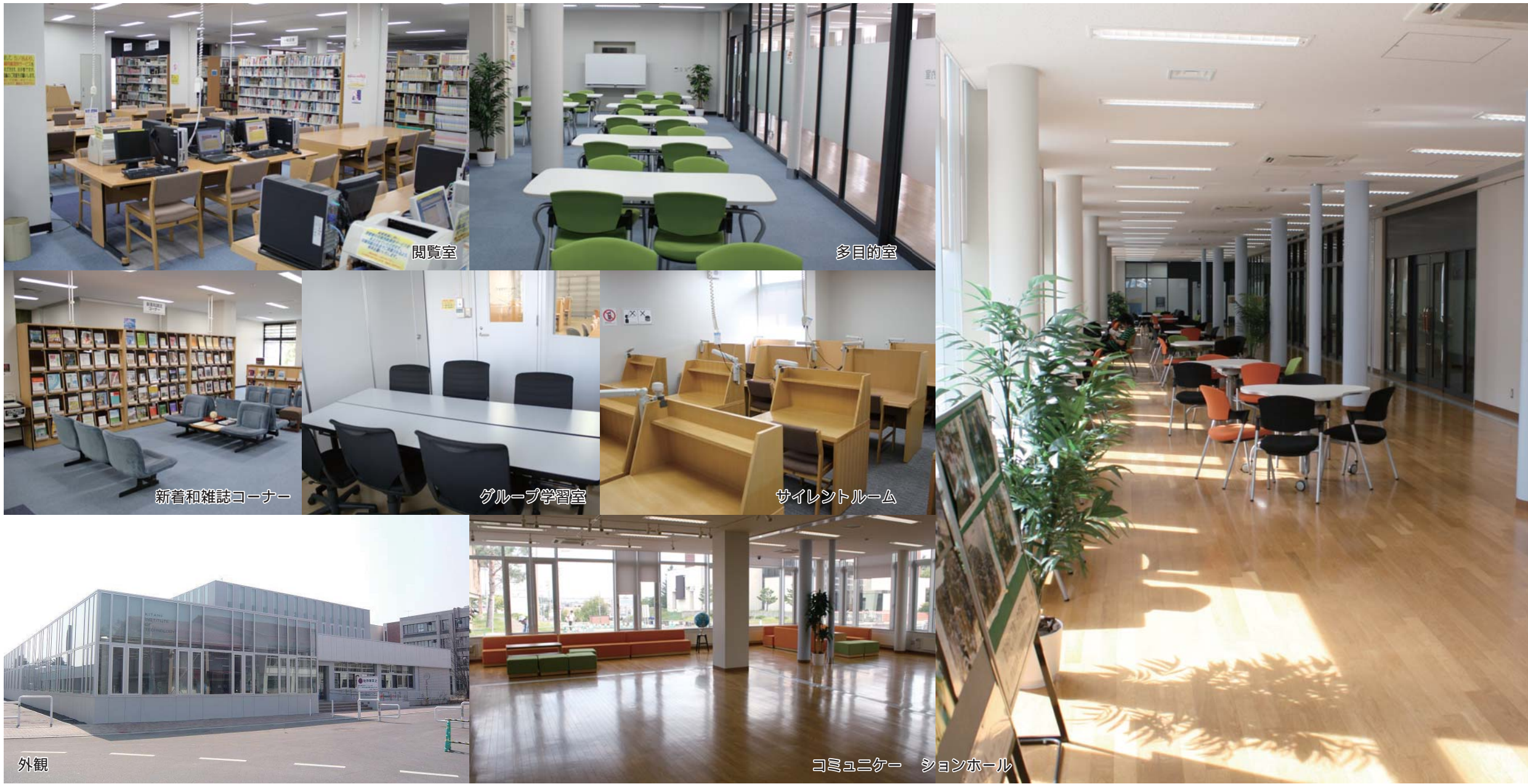
本学図書館の増築および改修工事が、平成18、19年度の2年間にわたって行われ、本年（平成20年）2月10日（日）にリニューアルオープンしました。工事期間中は、学生、教職員および市民の皆様には、利用上大変ご不便をおかけしました。紙面を借りて、深くお詫び申し上げます。

新装の図書館は、従来のイメージを超えて、「学ぶ・集う・リフレッシュ」をキーワードに、本学の学生・教職員のみならず、北見市民の皆様にも開かれた、知的交流・融合の場を提供することを目指しております。市民の皆様の活発、積極的なご利用をお待ちしております。エレベーターを新設した他、玄関の階段をスロープ化するなどバリアフリーに配慮しました。明るく、綺麗で清潔な建物となり、道内の他大学図書館関係者から、たいへん羨ましがられております。

改修部分は、学生から要望の多かった「グループ学習室」を増設し、勉強、討論の場所を提供しました。また、一人で静かに学習したいとの声に応じて「サイレントルーム」を新設するなど学生の勉学の場所の拡充に努めました。さらに、地域社会との知的交流の場として、産学官連携などを推進するための「コミュニケーションホール」や、知の拠点として討論や会議等が可能な「多目的室」を新設するなど、教育研究環境の充実を図りました。皆様の積極的なご利用をお待ちしております。

新装開館に伴い、開館時間を、従来の平日「9時から20時まで」を、「9時から22時まで」に2時間延長し、夜間利用の便宜を図りました。また、従来の土、日の他に祝日を開館日に加え、10時から17時15分まで、閉館時刻を45分間、遅くしました。

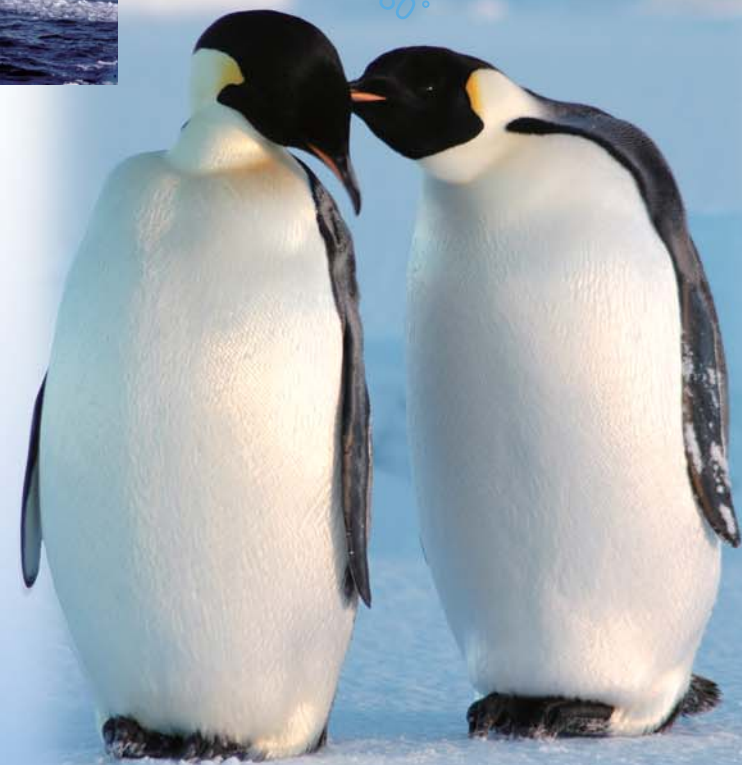
本図書館の特徴は、入館者数が非常に多いことです。改修前の平成17年度の入館者数は20万人を超えておりました。学生と教職員が合計で2千人強ですから、平均すると、1人当たり、1年間に100回近く、ご入館いただいたこととなります。これは驚異的なことです。これからも、多くの皆様にご利用していただけるよう、職員一同、鋭意努力したいと考えております。なお、図書館業務の改善点等にご意見等ございましたら、ご遠慮なくお申し付けください。皆様のご要望に出来るだけお答えし、本学の教育研究の発展に貢献したいと考えております。



「オホーツクスカイ」では、北見工業大学で行われている価値ある独自の研究を連載し、紹介していきます。



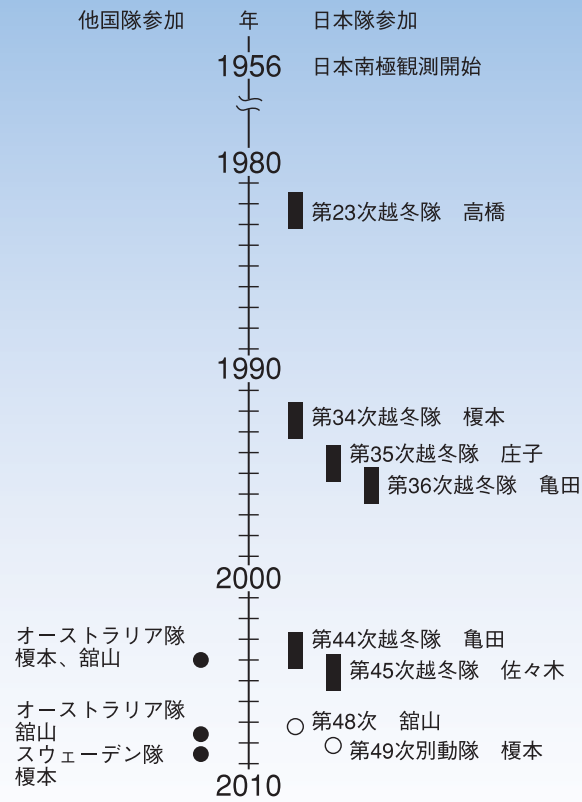
南極からみる地球



北見工業大学と南極

まもなく創立50周年を迎える北見工業大学は、南極と深い関わりを持ちながら地球規模の研究を進めています。これまでに、本学からは、延べ10回南極地域観測に加わり、6名の研究者が越冬を経験しています。南極に近い大学、北見工業大学の魅力を紹介いたします。

北見工業大学南極地域観測の歴史



南極での研究

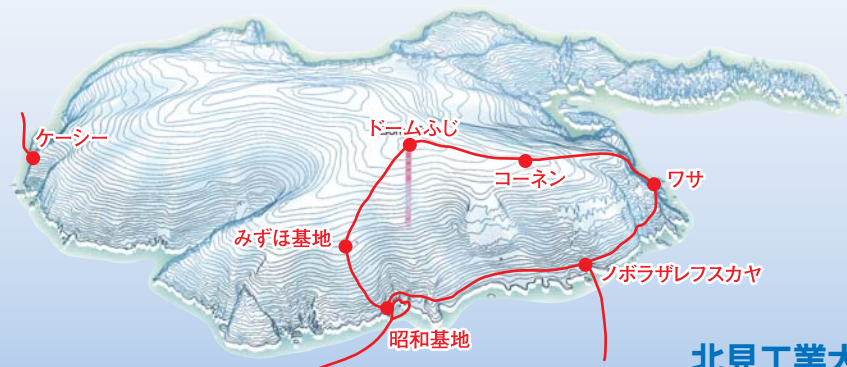
司会 研究広報シリーズ〈1〉に引き続き、今回も、越冬隊隊員経験や、数多く南極へ行き来をされながら研究観測実験を行なっている研究者の中から、雪氷科学研究チームの4名の先生にお越しいただきました。

いよいよ南極での経験についてお話しをお伺いしたいのですが、実際に南極ではどのような実験・研究をされているのですか？

高橋

南極では吹雪の観測を1年間毎日、1日も休まずに続けました。南極のみずほ基地(海岸から260km、標高2200m)で大陸斜面を冷気が下り降りる斜面下降風のために毎日吹いている吹雪を観測するものでした。その研究は、吹雪が発生する条件が温度や雪質によって変化する、という今の研究につながっています。

その目的は、「吹雪の雪害対策や視程障害対策など社会のため役立つはず」というのと、「南極大陸では莫大な量の雪が輸送されていて、場所によっては水の移動に対する寄与は、氷の流動に匹敵するはず」という南極での直感を確かめるためでもありました。



北見工業大学研究者の探査・観測ルート

資料提供：国立極地研究所

榎本

雪氷と気候の変動を調べています。気候が雪氷に与える影響と、逆に雪氷圏の存在が気候を安定化させたり、変化させたりしている仕組みを調べています。南極の海水や積雪は増えているのか減っているのか、南極大陸の気温はどのように変化しているのか、またこれらの原因は何か。観測手法として、衛星観測、無人気象観測、現場観測を行っています。また、これらの観測装置自体の改良も大事なテーマです。

2007年11月から2008年1月に日本とスウェーデンの共同観測で南極大陸上の昭和基地からみずほ基地、ドームふじ基地、スウェーデンのワサ基地までの2800kmの連続測定を行いました。この観測は国際極年にあわせた国際観測計画です。「ドームふじの向こうにどんな科学のテーマがあるか」探るのも課題です。

南アフリカから南極のノボラザレフスカヤ基地（ロシア）経由で昭和基地付近まで飛行機で到着し、氷床観測をスタートさせました。沿岸部から1000km内陸の標高3800mの高原まで、現場データを収集したのです。日本の雪上車4台、スウェーデンの雪上車4台が、積雪表層観測レーダー、氷床深部観測レーダーを搭載し、移動しながら連続観測をおこない、雪や氷を電波で計測しました。毎日10時間ほど雪上車で走行し、積雪表層の雪の構造から、1年間の積雪量、風向、平均気温を推定しました。ヨーロッパの氷床深層掘削の拠点であるドイツのコーネン基地やフィンランドのアボア基地も訪れました。

亀田

南極では、沿岸から約1000kmに位置しているドームふじ基地にて越冬観測を2回実施しました。深層掘削の準備をしながら、積雪の積もり方や降ってくる雪結晶の観察などを行いました。観察結果は、北見に戻って解析をしています。解析結果から多くのことがわかってきています。

南極内陸のドームふじ基地で採取されたドームふじ深層コア氷に含まれている空気量(含有空気量)の測定から、現在から2万1千年前の最終氷期極大期には内陸のドームふじは現在よりも標高が100m低くなっており、沿岸域の氷床は逆に400~1000m程度高くなっていった可能性がある事がわかってきました。これは、現在よりも寒い氷期には海水からの蒸発が少なく降雪量が少ないこと(内陸域の標高が低



高橋 修平

社会環境工学科教授
第23次南極地域観測隊越冬隊員
(1981年~1983年)
北見工業大学初の南極地域観測隊員
北見工業大学で唯一、みずほ基地にて3名で越冬



榎本 浩之

社会環境工学科教授
第34次南極地域観測隊越冬隊員
(1991年~1993年)
これまで3回、南極地域観測隊員を経験



亀田 貴雄

社会環境工学科准教授
第36次南極地域観測隊越冬隊員
(1994年~1996年)
第44次南極地域観測隊越冬隊員
(2002年~2004年)
北見工業大学で唯一、2回のドームふじ越冬の経験を持つ



館山 一孝

社会環境工学科助教
これまで3回、南極地域観測隊員を経験
将来、越冬隊員としての参加を夢みる



司会 内島 典子

地域共同研究センター
産学官連携コーディネータ
技術アウトリーチを専門とし、
北見工業大学の魅力を全国に発信



国際共同利用の航空ネットワークでの南極入り



榎本



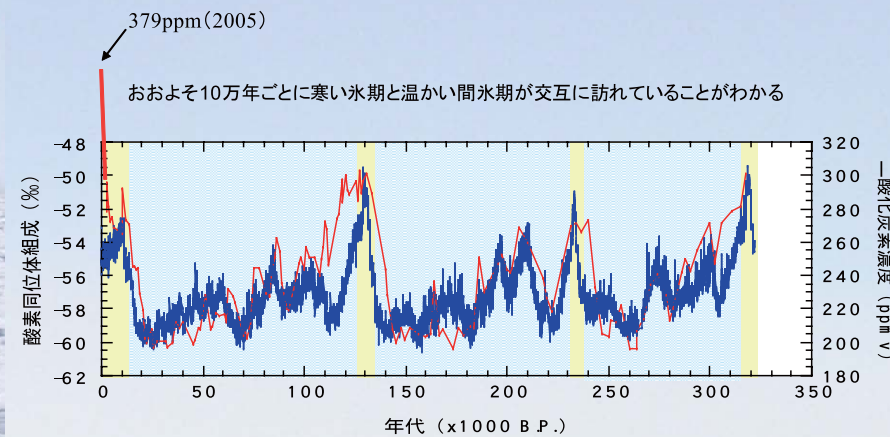
亀田



36本竹竿による雪尺測定

研究広報シリーズ(2)

南極からみる地球



南極の氷は地球環境の歴史の年輪がつまった貴重なセンサー

無人気象観測では、国内および米国で開発した無人気象観測装置を南極氷床の上に設置し、その場所の気温、風速、風向などの基本的な気象要素を通年で明らかにしました。

雪結晶の観察は、南極ドームふじで1年間越冬した際に、降ってくる雪結晶の写真を撮影し、その形態分類を行ないました。約1mm程度の砲弾集合型雪結晶の形態を明らかにして、それが地球の光散乱過程に与えている影響を世界で初めて明らかにしたいですね。

さらに、雪の積もり方の研究では、1995年に20m間隔で36本の竹竿(6本×6本、100m×100m)をドームふじ基地に設置し、それ以降、越冬中は15日毎、それ以外は1年に1回の観測を12年間継続しました。その結果、平均するとドームふじでは1年間に雪で78・2mm積もることがわかりました。これは水に換算すると、27・3mmに相当するんですよ。

無人気象観測では、国内および米国で開発した無人気象観測装置を南極氷床の上に設置し、その場所の気温、風速、風向などの基本的な気象要素を通年で明らかにしました。

雪結晶の観察は、南極ドームふじで1年間越冬した際に、降ってくる雪結晶の写真を撮影し、その形態分類を行ないました。約1mm程度の砲弾集合型雪結晶の形態を明らかにして、それが地球の光散乱過程に与えている影響を世界で初めて明らかにしたいですね。

さらに、雪の積もり方の研究では、1995年に20m間隔で36本の竹竿(6本×6本、100m×100m)をドームふじ基地に設置し、それ以降、越冬中は15日毎、それ以外は1年に1回の観測を12年間継続しました。その結果、平均するとドームふじでは1年間に雪で78・2mm積もることがわかりました。これは水に換算すると、27・3mmに相当するんですよ。

館山

主なテーマは「リモートセンシングで海水の厚さを測る」ことです。

電磁誘導式、電気伝導度式の3つのセンサを使い、衛星や現場で測定します。前述3つのセンサを使って面(人工衛星マイクロ波センサ)で広範囲に荒っぽく、線(船舶搭載電磁誘導式水厚計)で高精度に、点(定点設置電気伝導度式水厚計)で詳細な海水の厚さ・内部情報を測定しています。これらの手法は全てサロマ湖などでの実験から開発しました。

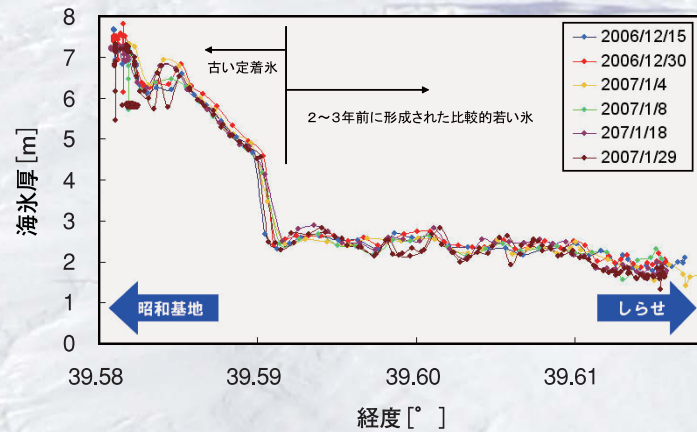
失敗もありますが、新しい手法を開発したことで、これまでわからなかったこと、不可能と思われていたことが徐々に判ってきました。実際に、サロマ湖やオホーツク海など北見周辺で開発・試験した技術が南極で役立っています。今後は技術をさらに進化させたいです。我々が開発した電磁誘導式水厚計が次期しらせの標準装備となります。このような最新技術の実用化に、今後も取り組みたいです。



館山



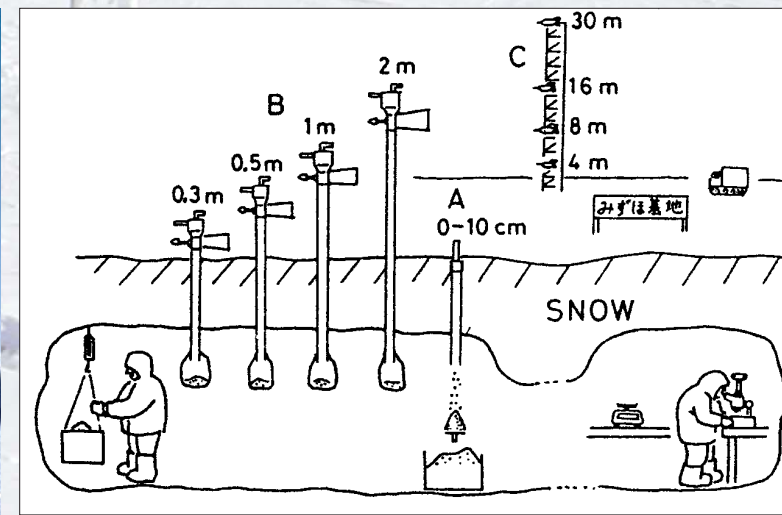
電磁誘導式水厚計による氷上観測



雪上面はアンテナのみで全て雪に埋もれているみずほ基地



高橋



南極からみる地球

必要なのは知識や技術よりもまず興味
自分の南極物語を心に描く



南極地域観測隊へ出発する館山
この中から、「いつかは南極へ」と夢を抱く学生も

南極への夢 ~新しい研究者~

司会 グローバルな研究、そして、南極でなければ経験できない体験、南極への大きな魅力感じています、学生さんが南極に行くことも可能ですか？

館山 既に他大学では何人もいます。やる気と努力が必要です。夢は「Made in Kita」の技術と研究者を増やすこと。毎年学生が南極や北極に行つて日頃の成果を発揮し、貴重な経験を積んで欲しい。帰ってきたらその経験を生かして様々な分野で活躍して欲しい。出来れば研究の道に進んで同僚あるいはライバルになつて欲しいと思っています。

亀田 国立極地研究所の助教ポストや大学の助教ポストを使って南極観測隊員になる大学生がいます。私が2003年にドームふじで越冬観測した際には、修士課程1年の大学院生と一緒にした。彼は1年半後の帰国時に再び修士課程1年からやり直し、4年かけて大学院修士課程を修了しました。

榎本 他大学からは南極にすでにたくさんの方が行つています。私達も南極に行きたいという学生を待っています。必要なのは知識や技術よりも興味を持ち、そして自分の南極物語を心に描くことです。動機が強ければ技術や知識も身につく、実現する方法も見つかります。

高橋 熱意があれば可能です。我々の研究室によく顔を出す学生がいますが、大学は雪や氷を研究できる大学がいいということが入ってきたことと、彼なんかは最有力候補です。

全員 もちろん！可能です！！

司会 ぜひ新たな研究者が本学から生まれてほしいですね。

研究広報シリーズ〈1〉〈2〉の2回にわたり、高橋、榎本、亀田、館山の4先生に北見工業大学で行われている南極に関連する研究、そして、実際に南極で展開している研究や南極でのエピソードなどをご紹介いただき、その意義、魅力や面白さなどをお伝えしてきました。

先生方、ありがとうございました。

南極越冬経験をお持ちですが今回は登場いただけなかった庄子・佐々木両先生のご研究を含め、広報誌「オホーツクスカイ」では、北見工業大学で進める様々な価値ある独創的研究をご紹介します。これからの「研究広報シリーズ」もお楽しみに。



南極大陸内陸部で日本隊の出発を見送る

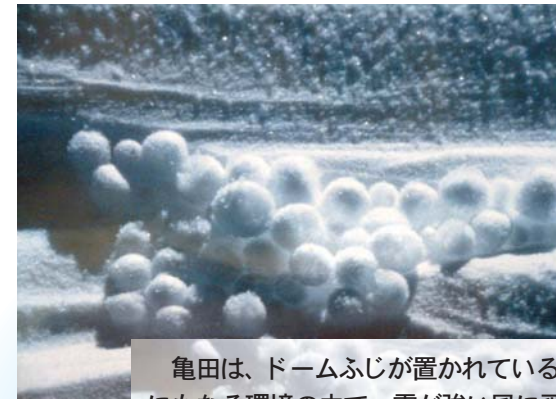
南極での生活 ~エピソード~

司会 研究もさることながら、私達にとって未知の世界である南極ならではの面白いエピソードをお聞かせ下さい。

亀田 -70℃の屋外に設置したドラム缶風呂に入るために、体から湯気のようなものが吹き出すこと。-70℃の屋外で+40℃のお風呂に入ると、お湯からの水蒸気が顔に付着して、霜ができること。この霜が耳に付くと大変痛いこと。なお、同様な経験は、屋外に露天風呂がある北見周辺のホテルなどで1〜2月の早朝に経験できると思いますよ。



-70℃の屋外に設置したドラム缶風呂(亀田)



亀田は、ドームふじが置かれている-80℃にもなる環境の中で、霜が強い風に飛ばされて転がりながらできる、小さな氷のボールについて研究しました。まるで雪でできた毬藻(まりも)のようです。亀田はこれに、「雪まりも」と言う名前をつけました。

高橋 25年も昔の越冬生活のときは、昭和基地にはやっと衛星電話が入った頃でしたが、私のいたみずほ基地は無線だけが頼りでした。隊員は家族等3人に電報発信許可証を与えることができ、家族は電報局に行つて「南極昭和基地」と言つて電報を打つのです。すると電信電話公社(現NTT)は銚子無線局から昭和基地へモールス信号の無線で届け、昭和基地からは音声の短波通信で伝えてきます。我々にはモールス信号は無理なので「朝日のア」と言つて通信の秘密を保ちつつ通信をするのです。字数に料金がかかることでもあり、電報文は家族同士の短縮暗号を使つたり、できるだけ簡潔に工夫をこらしたりものです。語り草となつていある隊員の奥さんからの文章は「アナタ」という3文字だけのものでした。前後の事情はわかりませんが、色々な感情がこもっているものだと思いますか？



七面鳥の丸焼きも登場した3人だけのクリスマスパーティー(中央:高橋)



みずほ基地 冷やしそばを食べる(中央:高橋)

ホモ・ルーデンス アソビ人の愉しい知識

北見工業大学共通講座は、

テクノロジーやサイエンスとは異なる視点から、

人文科学・社会科学の領域の公開講座を市民対象に例年開講しています。

具体的には哲学・倫理学、言語学、文学・比較文化学、

比較法学のそれぞれ専門家が自身の分野で講義しています。

昨年4回目を迎えた講座の全体のテーマは、「知ることは愉しい」です。

生きていくうえで、人間に愉しみを恵む、アソビのような知識。

人間を他の動物と区別する立場、ホモ・ルーデンス(アソビ人)こそ私たち

の在り方、というわけで、「アソビ人の愉しい知識」という

講座を開講しています。

いままでに取り上げたトピックスの中から、

以下にいくつか

紹介します。



シェイクスピア読みかじり 「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」 が問題だ!(沙翁翻訳事情)

鳴島史之(北見工業大学共通講座准教授)



シェイクスピアというと、有名なハムレットの
To be or not to be...があります。この台詞は、古
くは坪内逍遙の時代から、いろんな翻訳が出てい
ますが、「生きるべきか...」に定着するまでに、さ
まざまな紆余曲折を経て、現在に至ります。「生
きるべきか、死ぬべきか」はうまく行った例です
が、中には「このままでいいの、いけないのか」
とか、またはアリマス、アリマセン、アレハナン
デスカ? などという訳までありました。

アレハナンデスカ?では思わず笑ってしまいま
すが、こうした翻訳を複雑にした原因は、二つ考
えられます。ひとつは、英語本来が持っている問
題。もう一つは、シェイクスピア自身が持ってい
た問題です。

最初の問題は、外国文化の流入期に特徴的だっ
た、文化のズレから生ずる誤解です。アレハナン
デスカ?はその典型例ですが、こういった誤解は、
文化の疎通が充分になかった現代では、ほとんど
解消されました。

次の問題は、シェイクスピア独自の問題です。
シェイクスピアという作家はとても複雑な作家で、

純愛分析

福士航(北見工業大学共通講座准教授)

「冬のソナタ」などいわゆる「韓流」のTVドラマ等の影響をうけ
て、「純愛ブーム」と呼ばれる現象が流行したことは記憶に新しいこ
とと思います。「泣ける」映画の流行も時を同じくして起きていまし
た。「男女間の純粋な愛」というテーマは、人を引きつけてやまない
ストーリーなのでしよう。

しかし一方で、「美談は泣いて疑え」という言葉もあります。「イ
イ話」に涙して「感動した!」と締めくくればかりでは、せっかく素
晴らしいストーリーを体験したのにもつたない。そのストーリー
の素晴らしさはどこから来るのか?あるいは、その素晴らしいスト
ーリーの陰に隠された「真実」とは一体何か?このような問いを、純
愛ものの元祖とも言えるシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』
を題材に、考えてみました。



感激を表現する言葉、あるいは音楽

芳賀和敏(北見工業大学共通講座准教授)

ひとは、感激や喜びを自分ひとりの胸のうちに秘めて黙っていることなど、な
かなか難しいもののように思われます。思想家、芸術家などという、自己顕示欲
の旺盛なひとびとにとってはなおさらなこと、彼らは表現者(表現、Ausdruckとは
ドイツ語で、外に押し出すという意味なので)として感激を大っぴらに露
わにしてくれるでしょう。ここでは、恋が成就した、と言う風なプライベートな
感激ではなく、戦いに勝利した、という公共的な感激について取り上げることに
します。祖国が勝利したという愛国主義的な感動、思想的、階級的勝利への共感
など様々な形態がみられます。ナポレオンを巡る相対する感情、ロシアに対する
小国フィンランド、ソ連邦人民の勝利を讃える複雑な思い等、興味は尽きませ
んが、残された言説や音楽作品を評価してみると、とはすなわち、作品自体を虚心
に眺めてみました。

ある意味、心の闇を抱えていた作家であると言え
ます。また、そうした闇自体が文学を研究する時
の大きな魅力のひとつでもあります。ハムレット
の台詞は、その闇から発せられた言葉です。従っ
て、解釈が一通りでなくなる、という説明が付き
ます。

そこから、たとえ自国の文化であっても、個人
個人で異なる解釈には自ずとズレが生じ、それが
きっかけとなって、様々な読みが現れるという、
文学自体が内包する問題に至ります。そこで、次
に考えてみたかったのが、日本の作家との比較で
した。

例えば、三島由紀夫というと、現代日本では、
いろいろな解釈の存在する作家で、その作家像も
一律ではありません。もつとも複雑な作家の一人
とも言えます。三島由紀夫とシェイクスピアを並
べてみて、共通点を探ってみました。

三島の最後の四部作「豊穡の海」の構成は、三島
自身の解説では、手弱女ぶり、益荒男ぶり、外つ
国ぶり、そしてSF、という内容であると説明さ
れています。一方、シェイクスピアの作品群は、
ロマンチックコメディ、史劇・悲劇、ローマ劇、
ロマンス劇と発展したとされています。

ひ弱かつた幼少の子ともが、力を蓄え、演じ、
宣言し、散って行く姿は、三島の人生そのもので
すが、同時にシェイクスピアの生み出したコロオ
レイナスまたはマクベスの生涯に重なります。文
豪シェイクスピアは順風満帆の人生を終えたとき
れますが、果たしてそれだけで終わったのか、と
疑ってかかるのが文学者の悪い癖です。しかし、
そのおかげで尽きせぬ文学的問題に発展してい
くわけです。



知床の環境倫理学

山田健二(北見工業大学共通講座准教授)

世界遺産登録は知床にとって、また知床にかかわる人々にとって、どんな意味をもっているのでしょうか？実際、世界遺産登録にあたっては、各方面よりさまざまな検討課題が指摘されました。世界遺産としての要求水準に達しているか、登録後の保護・管理は実行可能か、あるいはさらに、観光資源としての適正な利用法はどういうものか、漁業・林業など、産業資源としての利用にどれほどの制約を設けるのか、などなど。要するに、自然と人間とのよりよい関係とはどのようなものであるかが、今回改めて問いたされたと言えるでしょう。ただしこの問いに正確な解答を与えるのは容易ではありません。農学や生態学に加え、経済学や実際の社会調査を踏まえた慎重な議論が必要になりますが、それとは別に、自然の価値をどのように考えるべきかという、倫理学的視点も必要になります。いわゆる環境倫理学です。知床を一つのきっかけにして、環境倫理学の世界を紹介しました。



もうひとつの物語

山田健二(北見工業大学共通講座准教授)

タバコや酒やギャンブルなど、わかっているけどやめられない、日常ごくありふれた「意志の弱さ」ですが、アリストテレスの昔から、意志の弱さは説明の困難な哲学的難問でした。哲学は人間を理性的動物と仮定しますが、知らないでよくないことを実行するならともかく、よくないと「わかっている」ものを、わざわざ「選んで」実行するということが、いかにして合理的に可能なのか？人間の中には理性の届かない、不合理な深い闇がやはり潜んでいるのだろうか？その闇では哲学はもはや無用のだるうか？しかし、最近の依存症研究によれば、コントロール不可能なものとして自分を再認識することで、不思議なことに自分をよりよくコントロールすることが再び可能になるらしいのです。不合理性を合理化する、哲学の冒険を試みました。



ジョークから見るロシア社会

阿曾正浩(北見工業大学共通講座准教授)

ロシアには、アネクドートと呼ばれる小話の文化がある。帝政ロシアからソ連社会主義まで、ロシアでは、自由に物が言えない時代が続いた。そんな時、ロシアの民衆は、表面は権力に従う振りしながら、裏ではアネクドートで権力者を風刺し、憂さ晴らしをしてきた。アネクドートは、ロシアの過酷な現実のパロディであり、権力者への一口レジスタンスとしての役割も果たしてきたのである。ソ連崩壊後の有名な例の一つ。「社会主義とは何か」「資本主義(帝政ロシア)から資本主義(現代ロシア)へと至る、つらくて長い道のりのことです」

この講義では、ロシアのアネクドートを紹介しながら、ロシア社会の特質やロシア人気質を探ってみました。

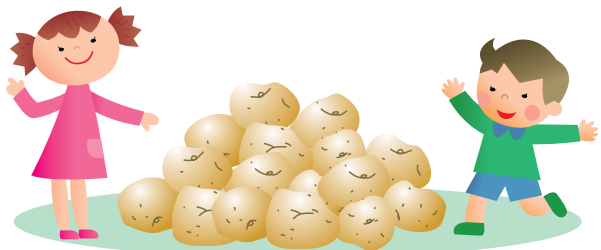


ホッタイモイジルナ!?

土橋善仁(北見工業大学共通講座准教授)

英語の発音はなぜあんなに聞き取りにくいのでしょうか？知ってるはずの単語なのに聞き取れない。読めば分かるのに、聞くとサッパリわからない。読めば分かるのに、聞くとサッパリわからない。そんな経験をしたことはありませんか？なぜなのでしょう？話すときでも、丁寧に「ホワットタイムイズイットナウ？」と言っても全く通じないのに、「ホッタイモイジルナ？」と言えば通じる(かもしれない)のはなぜなのでしょう？

日本語も英語も、同じ人間の言語。そんなに違うはずはありません。では、何が同じで何が違うのでしょうか？母音でしょうか？子音でしょうか？本講座では、母音や子音といった表面的な音の背後に隠された「構造」を解き明かし、日本語と英語の発音の差異を言語学の観点から考察しました。さらに、構造という概念が言語学の中でどのような意味を持つのかあるいはそれがどのように獲得されるのかという言語学最大の問題を概説しました。



夢と想像の哲学

水本正晴(北見工業大学共通講座准教授)

私たちは、外界からの刺激にただ反応して生きているのではなく、独立の「内的な」世界を持つと言われるものです。そうした「内的」と思われるものの最たるものが、「夢」と「想像」でしょう。特に夢については、起きている時は想像もしないような突飛な夢を見ることがないでしょうか。その意味で夢は自発的な想像を超えており、そこではあなたかももう一つの別の世界を受動的に経験しているように思われます。ただし、そう言う夢や想像はとも私のものでも、外からは観察できないと思われがちですが、今日では科学的アプローチで様々なことがわかってきています。そうした科学的探究の成果を概観しながら、本講座では以下のようなト

- ピックについて哲学的に考察しました。
- (1) 夢とは何か？
- (2) 夢の神経生理学
- (3) 夢の中の「私」
- (4) 夢の進化論的価値
- (5) 知覚と夢、知覚と想像
- (6) 明晰夢：意図通りになる夢？
- (7) 夢は想像の一種か？
- (8) 夢、想像、現実

ホモ・ルーデンス

誌上公開講座・2(共通講座)

アソビ人の愉しい知識





咸陽の古木を囲んで
パンザーイ

樂安邑の家屋で
書簡を読む

仙巖寺普請の願かけ：願いを込めて真剣に書く様子。

韓国 慶尚大学 交流研修を終えて

国際交流センター 特任講師 堀尾佳以



晋州城前でジャンプ!



樂安邑見学中



歓迎横断幕の前で(正門)

土木開発工学科4年の土肥君が「慶尚大学のボランティアの方たちには、大変お世話になりました。イベントなどの時には盛り上げてくれました。正直、親善大使という、言葉は重たかったけど、交流はたくさんできたと思います。飲んだり、焼き肉をたべたり、楽しかったです。」と感想を書いてくれたように、韓国の学生さん達がゲームを準備してくれて、大いに楽しんだようです。日本とは違う楽しみ方を経験できたのではないのでしょうか。感想文にも「韓国の友人と二人で朝7時頃まで色々なことを話したことは今回の留学での大きな財産です。」とあったように、明け方まで交流は続き、親睦を深めることができました。

次の日は朝から咸陽の郡守さんを訪問しました。咸陽の歴史を学び、「さつまいもジュース」をいただきました。学生達が咸陽郡守さんの名刺に書かれているハンゲルを読んだのを見て、郡守さんが「凄い」と感心されていたそうです。事前韓国語学習が実を結びました。今後も続けて頑張つて、意思疎通ができるようになれば、と思います。

他にも、両班のお屋敷あとや、蓮池を見学しました。咸陽近郊は蓮や蓮根で有名なようで、昼食も蓮根づくしの定食で、めずらしい蓮のお茶も堪能しました。1泊2日という短い時間でしたが、とても内容の濃い旅行だったようです。

研修最終日は、午前・午後とも講義で

2008年8月18日から5泊6日の日程で、韓国の晋州市にある国立慶尚大学校工科大学との交流研修がありました。北見工業大学からは9人の学生が参加し、韓国の学生さん達と交流を深めました。

慶尚大学は学生数2万の総合大学であり、今年でこの研修プログラムは10年目を迎えました。隔年の相互訪問となっています。今回の研修について、研修参加者の声を交えながらお伝えしたいと思います。

初日は、釜山港まで迎えに来ていただき、釜山で昼食をとりました。その後、バスで晋州市に移動。大学の正門に立派な横断幕が掲げてあり、学生達は感動した様子でした。

大学に到着してから早速開講式があり、韓国の学生会の皆さんと顔を合わせました。その後、キャンパスツアーで大学構内を散策しました。歓迎夕食会は焼肉で、お酒の席の作法を学びました。情報システム工学科3年の副島君は、「初日の夕食会から言葉の壁はありましたが、和気藹々と(ヒョン)達と酒を飲み合えたのはとてもうれしかったです。」と感想を述べています。

(홍)ヒョン：韓国語で兄の意。親しい関係にある血縁の無い年長者にも使用する。男性からの呼称。

2日目は「日韓文化の理解—茶室を中心に—」という講義を聴きました。機能材料工学科3年の緒方君は「まさか千利

した。【晋州市の歴史・チャンダムに見る韓流】という講義は興味深かったようで、真剣に聴いていました。午後は英語の【東アジア3カ国の連携】という講義で、少々難しい内容だったのですが、分からないところは質問しながら、一生懸命学んでいました。

授業後は、お別れ会、ボーリング、ナイトクラブと盛りだくさんの内容でした。特に、学生同士で遊べるのも最後とあって、皆、思う存分楽しんでるようでした。特に、お別れ会で韓国の学生が言った、「会える」と信じていれば必ず会える」という言葉に感激し、思わず涙した学生もいました。気持ちが通じ、良い関係が築けた証拠でしょう。

出発の日の朝。ホームステイでお世話になった家族とそれぞれ別れを惜しみ、学校に集合しました。今回、2日でホストファミリーが変わった学生もいました。電気電子工学科3年の沖松君は、「短い時間で本当の家族のようになれて幸せな時間でした。来年の冬休みにこの家族が私の実家である京都にやってきてホームステイする予定です。そのときに韓国語が少しでも上達しているようにこつこつと勉強しておきたいです。」と感想を述べています。今回の交流で一般的な家庭に滞在できたことは、良い経験になったと思います。

博士後期課程システム工学専攻2年の朱智登さんは「一番楽しかったのは、韓

体の生き方を韓国で学ぶとは思っていませんでした。びっくりしました。日本の昔のお茶室が小さい理由を通し江戸時代の歴史・思想を知る事ができ感動しました。」という感想を寄せてくれました。

講義の後、晋州市内の見学に出かけましたが、皆の印象に深く残ったのは晋州城だったようです。要塞として、度々戦地となった場所ですが、皆、ガイドさんの話に熱心に耳を傾けていました。

3日目、4日目は1泊2日で樂安と咸陽を訪問しました。POSCO製鉄所を見学、昼食は両班定食を食べ、樂安にある民族邑を見て回りました。この民族邑には現在も人が住んでいるため、昔ながらの生活を垣間見ることができました。大ヒットドラマ「大令長(邦題：チャンダムの誓い)」のロケ地でもあったようです。古い家や生活習慣等、学生たちは興味津々でした。(両班：韓国の貴族)

次に、樂安にある仙巖寺に行きました。韓国では屋根の普請時に寄付を募るため瓦に願掛けをすることがありますが、研修参加者全員が思いの願いを、それぞれ、様々な言葉で記しました。日本語は勿論、韓国語や中国語で書かれた瓦が仙巖寺の屋根に上がることでしよう。

「日本へ無事帰れますように」「日韓友好」「世界平和」などがありました。皆の願いが叶うと良いですね。

その日の夜は、竹塩を研究されている仁山研究所の宿泊施設に泊まりました。



MT (Membership Training) 1泊2日の旅：夜の宴会で韓国の文化を学び、大いに盛り上がる。



台湾勤益科技大学との国際交流締結

2008年7月28日、台湾勤益科技大学(National Chin-Yi University of Technology)の林灶生教授、陳文淵教授、曹振東教授、黃世演教授が本学を訪れ、本学と台湾勤益科技大学との学術・教育交流協定書の交換を行いました。

本学と台湾勤益科技大学とは、以前から本学の教員と共同研究を行っているなど交流が盛んであり、今後も引き続き研究者及び学生の交流についても進めていくことが確認されたため、「学術・教育交流協定」及び「学生交流に関する覚書」を締結する運びとなりました。

残念ながら、今回本学を訪問される予定だった陳坤盛学長は所用により来ることができず、今年度両大学を訪問し、研究者学生の交流や国際共同研究について話し合うためのプログラムを計画しております。

なお、今回の協定締結で本学の学術・教育交流協定大学は8か国18大学となりました。



この交流研修を通して、電気電子工学科4年の大森君は「自分の触れたことのない異文化を目的の当たりとする事で、日本という自分の生まれた国との比較、自分自身もつと日本や世界の事を勉強すべきだと感じる事が出来ました。まだまだ知らない事だらけの世界で一つでも多くの事を知りたい、勉強したい。そんな気持ちを芽生えさせてくれた、本当に濃い一週間でした。」と感想を述べてくれました。

また、土木開発工学科4年の佐々木君は「韓国に1週間留学してみても、韓国に対するイメージが変わりました。韓国の



人の学生さんと一緒に過ごせたこと。若さはパワーだった。情熱を感じた。初めて日本のお酒のゲームをした。日本人、韓国人、台湾人、中国人、そんなことは関係なかった。カラオケに行つて、英語の歌、日本語の歌、韓国語の歌、中国語の歌、意味は全部分かるわけじゃないけど楽しめた。クラブにも行つた。《音楽十照明十ダンス十若者十リラックス》美しい夢みたいな現実」と、今回の交流で得たものの大きさが伝わってきました。

博士前期課程化学システム工学専攻1年の林心益さんも「6日間は、本当に短かったけど、今回の短期交流の体験、特に初めてのホームステイと優しい家族、新しい友達：私はたくさん素晴らしい思い出を作ることができました。」と話してくれました。

最後に、博士前期課程電気電子工学専攻1年の矢澤君は「日本語が話せる、日本へ行ったことがあるなど、日本に興味を持つていた方がとても多く嬉しかったです。相手のことを理解する姿勢の大切さは、個人単位でも国単位でも通ずることがある：これが、今回の研修で私に学べた一番のものだと思います。」と話していました。

2008年夏、様々な問題で日韓関係が不安定な中の訪韓でしたが、この交流を通じて得た友人と経験を糧に、韓国との懸け橋となってくれることを願っています。

学長室ブログがスタート

4月から学長室ブログ「オホーツクの空から、学長室からのメッセージ」がスタートしました。鮎田学長、高橋理事、佐々木理事、田牧副学長、青木副学長、石川事務局長の6人が交代で近況を投稿していきます。

北見工業大学ホームページ
(<http://www.kitami-it.ac.jp>) でご覧くださる。



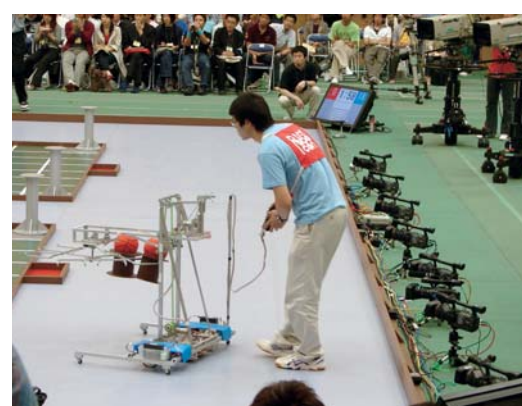
当日は、全国から142組198名の父母が参加し、鮎田学長からの挨拶、全体説明の後、田牧副学長から「本学の教育及び就職状況等」について説明がありました。また、学生後援会会長からは、後援会の活動状況が報告されるなど、様々な情報が父母に提供されました。

その後、各学科・専攻に分かれた個別面談では、各学科の教員が対応し、父母からは修学状況、就職等について質問が出され熱心なやりとりが交わされました。

今年度も昨年度に引き続き大学祭に併せて開催するとともに、説明会場前においては、昨年3月に大学認定商品となった菓子「雪まりも」他、大学関連グッズの販売も行われました。今後は、札幌、盛岡、大阪の各地で開催されます。

NHK 大学ロボコンで “アイデア賞” “特別賞” ダブル受賞

6月8日、国立オリンピック記念青少年総合センター(東京)で開催された「NHK大学ロボコン2008」(ABUアジア・太平洋ロボコン代表選考会)に、北見工業大学タマネギ戦隊チームが出場しました。



結果は、予選リーグを6位で通過し、決勝トーナメントでは準々決勝で名古屋工業大学に敗れたものの、マシンを跳ばして得点するという難しい技術に挑戦して観客を感動させました。

環境研究紹介 DVDを制作

7月7日～9日に開催された北海道洞爺湖サミットにおいて、道東から世界に環境映像を発信するため、本学、帯広畜産大学及び東京農業大学が連携し、環境に関する研究の取り組みについての映像作品(DVD約33分)を制作しました。



衛星によるオホーツク海の海水観測(榎本教授)

機械工学科教授、「地中熱ヒートポンプ冷暖房システムの実用化」(佐々木正史・機械工学科教授)の4つの研究事例が紹介されています。

せたことが高く評価され、アイデア賞と、トヨタ自動車からの特別賞をダブルで受賞しました。



平成19年度 ベストティーチング賞 表彰式を実施

6月13日、平成19年度ベストティーチング賞の表彰式を実施しました。同賞は平成13年に創設されたもので、今回は平成19年度に実施した学生による授業評価の結果、授業に対する準備、熱意、指導等が顕著であるとされた教員7名が受賞し、このうち1名は3度目、3名は2度目の受賞となりました。なお、授業形態や教材などの工夫で教育改善が顕著であったことが高く評価され、アイデア賞と、トヨタ自動車からの特別賞をダブルで受賞しました。



知床のGPS3Dバーチャルビジョン除雪支援システム(羽二生教授)

舞踊パレードに参加

この映像作品は、サミット開催期間中、国際メディアセンターが設置されている留寿都リゾートホテルの北海道情報館において、海外のプレス関係者に向けて放映されました。映像は北見工業大学ホームページ(<http://www.kitami-it.ac.jp>)で公開していますので、ぜひご覧ください。

7月18日、「北見ばんちまつり」舞踊パレードに北見工業大学チームが参加しました。舞踊パレードは、「北見ばやし」に合わせ踊りながら、商店街をパレードするもので、今年は約2,500人の市民が参加しました。本学からは学生、留学生、教職員77人が参加しました。



父母懇談会を開催

6月21日、北見工業大学を会場として「父母懇談会(春季)」を実施しました。

「ベストティーチング賞」受賞者
 機械工学科 准教授 山田貴延
 社会環境工学科 助教 館山一孝
 電気電子工学科 准教授 菅原宣義
 情報システム工学科 教授 山田浩嗣
 バイオ環境化学科 准教授 星 雅之
 マテリアル工学科 准教授 宇都正幸
 共通 講座 准教授 阿曾正浩

つた教員を表彰する「エクセレントプログラム賞」の該当者はありませんでした。



KITAMI INSTITUTE OF TECHNOLOGY



Okhotsk Skies

●北見工業大学広報誌編集委員会

委員長 学長補佐(広報担当)
委員 機械工学科
社会環境工学科
電気電子工学科
情報システム工学科
バイオ環境化学科
マテリアル工学科
共通講座
地域共同研究センター
企画広報課

田村 淳二
鈴木聡一郎
八久保晶弘
菅原 宣義
後藤文太郎
兼清 泰正
射水 雄三
鳴島 史之
鞘師 守
内島 典子
小野 勝巳
坂田 寿

●本誌へのご意見をお聞かせ下さい。
●本誌は北見工業大学で無料配布しています。
●郵送のご希望もお受けします。

●連絡先 北見工業大学企画広報課

〒090-8507 北見市公園町1-65番地

TEL(0157)26-9116

FAX(0157)26-9122